

名誉館長館話実施報告抄

新野 直吉*

山中新十郎・伊藤 弥太・中田 羽後

はじめに

平成23年度は、「先覚記念室」「菅江真澄資料センター」に関する例年の館話を各3回行ったが、それに先立ち、5月13日「あきた(齋田)『日本書紀』に登場」・5月27日「秋田城と北の海みち」・6月10日「出羽国と鳥海山」・6月24日「清原氏とその周辺」・7月15日「黄金と馬の文化」・7月29日「蒙古来襲と古四王神社」という総称『秋田・東北の歴史と文化を語る』なる6回のお話を各金曜日に行った。ここでは先覚についての9月16日(金)「山中新十郎」・9月30日(金)「伊藤弥太」・10月14日(金)「中田羽後」の3回分について、文章化して報告する。

山中 新十郎

文政元年(1818)12月6日、平鹿郡の、当時「増田町」ともいい、「増田城廻村」とも称した増田村に、長五郎の四男である易吉として誕生した。生家は播磨屋という質屋兼業の農家であったという。播磨はこの家の出身地を表しているものと考えられるから、生来一般の秋田の人とは違う人間素質を身に備えていたものであろう。6歳の文政7年(1824)分家の長之助の養子になった。数え年では7歳になる。跡取りの要員としての養子であるから17歳で結婚ということになり、男の子も生まれたのであるが、野心的ともいえる発展性を素質として持つ易吉は、天保6年(1835)の数え年18歳で、増田を脱出して久保田城下に出た。

平凡な結婚生活に満足できなかったのかもしれないが、やはり行動的な広い世界の活躍を夢見たのであろう。雄平仙三郡の「産業方」として地域を豊かにし、ひいては藩内を豊かにしようという大きな望みを持っていたのだと、伝えられて来た。

久保田に出る際に「文久銭三百両を所持してい

た。それを藩府に提供し、雄平仙三郡の産業方になろうとした」と伝える文献もあるが、時は文久年代まで20年余りも先立つから、要するに当時の通用銭を300両も持っていたというのであろう。だが、地方出の若者の希求や計画がそう簡単に達成されるような時代ではなかった。城下では生活も出来なくなって増田に戻ることになる。

だがそこが他の者と違うところであろう。易吉は失意の淵に沈むなどということではなかった。彼が考えて実行したのは、増田の町に連なる沢目の村々で、その特産とする生糸と煙草を、代金前渡し専約で独占買い取る商法の展開だったのである。増田沢目に止まらず稲庭・猿半内・椿台などの諸沢目にもその商域は及んだ。天保8年(1837)には250軒余の農家はその取引対象であったという。

翌天保9年に生糸の前渡金は230両で、生糸の買取量は200貫だったという。事情に詳しい郷土史家柴田久蔵「山中新十郎」(『秋田の先覚』1)によれば、当時1匁60文の値段だったから、200貫で1200両の収入だったという。

また天保11年(1840)の記録でも、煙草は年に1200～1300斤分の貸付で、1400両の取引をしていたことになることと記述されている。概算両方の計では3000両以上だということであるから、易吉の経営活動の地元には及ぼした影響力は、村々の地味な生活にとって、生活を支える強力な経済力として尊重されたことが分かる。

この財力を自信の支えとして、天保11年易吉は再度久保田城下で経営するという目的を達成すべく、行動を開始したのである。この際は出向くに当たり『殖産興業策』なる自作の政策論を携えていたが、保戸野愛宕町で、藩士小野崎通敏と偶然出会い、持論を示したら「識見は広大、論述は

*秋田県立博物館

正当」と評価され、その提言により藩校「明德館」に差し出すことにしたという。藩産業の事業当局でない学館に提示というところに、理論に優れた学力というものの存在が窺われる。

本人はこれが具体的献策になり、藩の用務に関与できることとなると信じ期待したのであるが、学館からは「感ずるに余ある」旨の評価箋が附されて返還されただけだった。幕末とはいえ、身分制明白な社会では当然の対応であったといえる。

けれども易吉は非凡な人物であるから直ぐに念いを切り替える判断をしたようである。すなわち文書による政策提言で自分の存在を評価させることは駄目で、自分の事業の成功を、実際に形態と成果とで見せつける方法でなければならないということに、気がついたらしいのである。しかしながら他所者としての生活では孤独に堪え難かったのか、茶町扇之町の荒物屋の茜屋に養子となって、その家の養女と一緒に、一女の父親となった。

天保12年(1841)数え年24歳の易吉は、養子生活などでは満足できないという、本来の自分に立ち帰ったのであろう、大町三丁目の町田宗九郎絶家跡を再興することで、名実共に城下の商人となるべく呉服太物の仲買商となることにした。二丁目に中村という親類で街の世話役が住んでいたその協力を得たのである。城下の商人として名も改め「山中新十郎信広」と名乗るようになった。

嘉永元年(1848)店を開いて8年に達し安定に至ったのであろう、登町の長谷川喜右衛門の娘ソノを娶って、夫婦で励んだ。結果家業は一段と伸張しやがては大町三丁目西側に土地を求めて、邸宅を構えることになる。地位も安定し、嘉永5年(1852)「町処用達」「郡方織物用達」の役務を兼ねる立場になった。藩外にもその名を知られる大商人になると、少年時に飛び出した増田の養家の父親である長之助と其処に残した男子とを放置できない心境になった。2人を引き取るのである。そうなれば茶町の茜屋にいる女子にも同様の思い遣りが示されることになる。娘も引き取って一緒に生活することにした。大政商になるべき身辺整理が完了したということになる。

安政元年(1854)いよいよ彼の政商としての本

領が発揮されることになる。久保田藩当局に対して衣料品の陸路移入の禁止を建白するのである。藩は応じて2年から大町家督商人の一部を除き絹・紬・木綿・麻と古手(古着)などの陸路移入を禁止することに踏み切る。

この問題は、陸路買い入れでは代金が銀で支払われるだけということになる。それが海路で移入する場合は、運んで来た船の帰りに米など秋田の物産が積み込まれるので、片取引の銀流失になるのを防ぐことができる相互取引になるという理論である。だが現実には衣料が必要不可欠の生活用品であり、帰り船にも積み込むべき物資がなければ相互取引も空念仏にならざるを得ない。

秋田県になる地帯には佐竹領の土崎・男鹿諸港・能代という北前船や西廻海運の港があり、由利諸藩領にも塩越・古雪・石脇などの諸港があり、海運に恵まれていたところなので、陸路取引の移入などは総体の25パーセント程度であった。従って陸路移入を禁じたのみでは施策の目的を達することはできない。安政3年(1856)7月、結局藩は海路移入木綿の主流であった越後木綿の沖受入れを禁止し、万延元年(1860)土崎湊4万反・能代湊1万反以外禁ずる処置も行うことになる。

ここで新十郎は「国産(藩内産)木綿」の増強策ということを安政5年(1858)に提起することになる。藩は建言を受け容れる。新十郎は翌6年に「山新木綿」の生産を開始する。実は久保田・角間川・横手・大森・浅舞(それに由利にも)などでは、地織木綿の紡織や染色の技術が存在していて、中には17世紀の創業という伝統を持つものもあった。だがそれら在方商人の扱う事業は生産力が限られていて、19世紀初頭の実情では17万5000反にも及ぶ移入木綿が藩内で用いられていたのである。山新木綿はその大量を補うべく樹立の新式の事業であった。先進地の越後から技術も機械と共に移入し、新しい業務を展開した。山新本店で「打ち綿」をして、城下町の家(侍の家)の女性や町人の子女によって糸引を行い、本店に集めて染色する。そして下級藩士の女性家族を中心にした女工によって賃織りするという工程で仕事は進められる。工場制手工業と訳される「マニュファクチュア」である。

文久3年(1863)の段階では、榑山愛宕下新町・同南新町・同築地本町・同登町・同仰信寺通から、手形奥屋敷・下中島・保戸野鉄砲町・同南鉄砲町の9カ所に工場があり、各所20台から30台の織機を設置して、総数400台にも及ぶ織機で操業していたのである。

やがて20万反を超える綿織物の生産が行われ、秋田は奥羽地方最大の綿業地帯となった。自然その販路も拡がり、北は津軽から南は米沢に及ぶ地域に「山新木綿」の市場は伸びて行った。

しかも新十郎は、自分の系列工場の生産だけを閉鎖的に行うわけではなく、他の家内手工業の人達にも、希望する者には機械を貸し与えて生産を助けたのである。さらには城下だけではなく、横手をはじめ県南の織物業にも好意的であった。そしてそこでは、農村部の労働力を用いる問屋制家内工業を主とした営業が行われていた。

元治元年(1864)3月彼は営業方面のことは別に藩政に大きな寄与をした。長州藩では「攘夷」の詔勅によって外敵と戦ったのに、幕府は長州征伐をしようとしている。これは不当だから、久保田藩の理解協力を得たいという立場から、長州藩の書翰を持参した特使の木梨彦右衛門について、藩では一行7名の接待を山中新十郎に託した。

慶応2年(1866)9月に藩から山中への表彰の書状には「長州御使者木梨彦右衛門殿止宿仰蒙候砌、町並数百軒焼失之処、家財之焼亡も不顧、彦右衛門殿を取扱候段、神妙之至り」と賞詞を述べて、「御紋付御社袴(かみしも)」を下賜している。即ち城下火災のあった変事の中で、使節10日間の久保田滞在中、誠意ある篤い接待をして、藩の面目を示したのである。

このような彼に対して同じ慶応2年9月、佐竹藩では「諸事御用向拔群に付、独礼御用聞、永々苗字帯刀御免被成置候者也」という厚遇の沙汰書を附与した。町人で苗字帯刀を許される者は、久保田藩では累代御用商人の豪商那波三郎右衛門しかいなかったのであるから、いかに破格の処置であったかが分かる。

いうまでもなく、山中新十郎の木綿業などにおける藩政寄与が沙汰書の如くに「拔群」だったからのことであるが、若い易吉時代からの彼の念願

が達成された訳であり、正に50歳を数えようとしていた彼の心中や如何というところである。

実は那波三郎右衛門祐章の妻女のトミは新十郎の姉であった。若年で城下に出てきて野望ともいえる行動が成就せず窮した際、常人ならば姉に助けて貰おうとしたであろうが、彼は違っていた。多分那波の威に頼って成功するのは、真の自力による目的達成にはならないから、自分は独立独歩して義兄と肩を並べるようになるとうと心に誓っていたものであろう。

慶応4年(1868)のいわゆる戊辰の戦いはその2年後に到来した。藩では彼を「藩小荷駄方支配人に任ずる」という方策に出たのである。商人の山中が武家の大軍事部門の元締になった訳である。藩の武器弾薬調達輸送の中心に立っただけではなく、続いて官軍の総督府によって「官軍大小荷駄支配人」に任ぜられるのである。もちろん藩当局の推挙によるのではあろうが、西南諸藩の兵力に君臨した官軍朝廷側の権威のもとに、戊辰の合戦において、町人の輻重部門司令官が実務を執って活躍することになったということである。

久保田は東北で先ず唯一の勤皇(官軍)藩であり、そして時代は版籍奉還といわれる明治維新の新方向に進む中のことである。山中新十郎の耀きは無上のものであったに違いない。

だが武家社会でのことである。町人の彼が名実共に維新政局や戦争の中で長期安定的に表舞台で客観的輝きを保てたか否かは定かでないところもあるが、大町三丁目西側の山中家が物品管理の場になったこと、北の戦線にも南の戦線にも小荷駄の補給に実務力を示したことは事実であったろう。

9月4日の下米町出火による久保田の大火で、山中家の邸も5棟ある土蔵の3棟も類焼したのに、多量の焼失軍用品を責任感強く補給したことなども伝えられている。その前の月に土崎港に英国の兵器販売船が入った際には、義兄那波三郎右衛門と共に佐藤時之助勘定奉行の相談を受けて、合計10万両の代金の中1万5000両は2人の生糸によって支払う(2万両は藩庫から現金と銅、3万両は大坂で調達、3万5000両は翌年春弁済)という方策を樹てて処理したという。

最も彼の本領発揮は綿業であるが、その原料綿

を日本海航路で大坂から受け入れるより、江戸から太平洋側を石巻に運び北上川で黒沢尻に運び、陸路で角間川に運び雄物川で土崎へという路順に切替える方策を考えた。いわゆる「平和街道」（平鹿－和賀間の道）であるが、その道路の開通完了は明治14年（1881）だということから、彼の生前には竣功しなかったことになる。

彼の詠んだ歌に「乗合の心もしらでみつびしの船の気ままに帰るかなしさ」というのがあり、土崎港に運ぶ荷を函館に三菱汽船がおろしたルーズさを憤ったのだという。函館経由は東廻海運か西廻海運か両方が考えられるが、単に怠ったのではなく、商売仇の策に三菱が同調したのかもしれない。要するに彼の商売仇は当然いた筈である。

明治になって、藩は無くなり、同6年（1873）の状況で「常（時）人数大人二十八人 此（の）白米一日（の）入用一斗四升 但し一人五合見込」なる家族数であった。この豪商が飯米の量を気にしているところを見ると、新しい秋田県になってからは、特権もなくなり経営に不安を感じなくなったのかも知れない。この年旭川新藤田山に父母を祀る祠を建てた。当然若い頃の親不孝も気になったのであろう。

明治10年（1877）9月9日関東・北越方面からの事業進入に経営困難の中60歳で逝去する。秋田泉の五庵山の墓地に眠る。

伊藤 弥太

明治25年（1892）4月2日北秋田郡西館村片貝で、倉助・ヨシの長男として誕生。養子の兄政吉がいた。父の実家は田代の地主だったというが、この生まれた家も豪農で母ヨシの生家であり祖父の伊藤平左衛門が家長であった。

翌26年に分家した。やがて家族は大館に出て住むことになる。大館町部垂（へだれ）町の根本家の屋敷内にある住居で暮らし、後年近所の小学校の学童相手などをする店を営むことになる。明治43年大館女子尋常高等小学校が設立される。

38年1月、前年勃発の日露戦争に志願して従軍していた兄政吉が、黒溝台の戦闘で戦死してしまう。14歳の弟たる彼は悲嘆に暮れる。だが春には大館中学校に進学するので、少しは悲しみを忘れ

るようになったことであろう。12月には弟の行三が誕生した。多分気も安まるが多くなったことであろう。

級友の明石敬吉の評によれば文学少年で音楽愛好少年だったという。そういえば明治44年7月12日付の「校友会雑誌」28号に「忘れ得ぬ夢」という文章を寄稿し、そこではトルストイに会い、「芸術家になりたい」というと、「汝の理想とする境界に入るべし。汝よく“汝の往く道”を全うせよや」と言われた。などと書くが、心中定まっていたのであろう、45年（1912）「第四学年修了」で上京する。画家を志しての挙であったという。美術をも愛好していた訳であろう。費用は母が出してくれた。

大正3年（1914）になると、前年10月に発刊の美術関係の雑誌「美の廢墟」2月号からの表紙絵描きを担当した。この雑誌は刊行した早稲田大学の学生立石美和等が、本流の早稲田の自然主義に対し、白樺の影響を受けた岸田劉生・木村荘八らさらに耽美主義好みの人々が、共に生み出したものであった。この頃石井漠と会い画家の途を決意する。彼は劉生のモデルになるほどの関係で、弥太の友人の兄である中川一政も、独学で油絵を始めた頃で、弥太に伴われて劉生を訪ねたりしていた。3年10月の第14回巽画会展に「酒蔵」を出品した一政の画を、審査員の劉生が入選させるような評価もしていた。

翌4年3月第15回巽画会展（東京・竹之台陳列館）に「静の肖像」「丘の冬」など出品。4月半ばから2週間伊豆・三島方面に写生旅行をする。10月現代の美術社の美術展にも「自画像」「風景」などを出品する。そしてこの年には野上豊一郎（後年法政大学長）の媒酌で静岡県三島町出身の小学校教員加藤ためと結婚をする。2人の間には晴弥と京太という2児が生まれたのであるが、やがてためは弥太から離れて行ってしまふ。

それでも5年3月の個展には「自分の家」「妻の顔」など各種の絵50余点を展示していた。武者小路実篤が劉生と共に彼を訪ねて来たのは4月下旬だった。7年（1918）には9月の第5回二科展に「静物習作」なる作品を出品し初入選するが、作者名は幼時の名「弥太郎」を記していた。三島

町六反田に居住していた。富士山麓にも住んでいたことがあるという。翌8年には大館に帰郷していた。大正10年(1921)9月第8回二科展に出品したものの、11年5月に劉生に窮状を訴える書状が届いたりしたが、出品など活動の記録は伝わらないという。大正13年この頃、沼津に居住しており、同地千本松原に住んでいた若山牧水と親交を持ったが、沼津商業学校の教員である岐部忠一なる人の世話で、市立幼稚園保母の益田よしと結婚した。

昭和2年(1927)牧水や岐部夫妻の励ましを受けて、年初東京府北多摩郡国分寺に移住した。10月にはよしとの長男雅太が生まれた。また10月から11月にかけての第8回帝展に「秋景」を出品し入選した。翌3年10月第9回帝展にも「山林風景」を出して入選した。それに先立ち9月5日から9日まで秋田県立図書館において個展も開催した。11月下旬には長女麗子も生まれた。

昭和4年1月の頃千葉県長生郡大東村字椎木小字下宿という処に転居し、更に後大館町上町に転居したという。4月第1回秋田美術展(東京朝日新聞社)と5月の同秋田展(山口銀行秋田支店)に「菜の花畠」など早春風景の絵を出品。この年新設の「刈田奨励賞」を受けた。悲しいことに12月に劉生が山口県徳山で享年38で没した。

5年(1930)2月第7回槐樹社展で「風景」出品「田中奨励賞」を受けた。4月には秋田市榎山黄金井小路に転居し、4月東京の、同月末から5月秋田の第2回秋田美術展に出品。7月次女敬子誕生。6年には大館町上町に転居。大館女子尋常高等小学校宿直室で浜松小源太ら教師と芸術を語った。7年第2回独立美術協会展で初入選し、5月三女彩子生まれ、石井漠舞踏公演会(大館座)に際し「大木のような石井漠氏」を「北鹿新聞」に寄稿する。

昭和8年夏再度の上京を志して、「滞郷記念個展」(大館図書館)に42点展示。10年正月には次男辰弥誕生。11年には部垂町の実家二階に転居、翌12年3月四女晴子誕生。4月第9回秋田美術展には「秋田犬」など出品。13年秋田市保戸野諏訪町に転居する。4月第13回国画会展に出品の「窓辺婦人」は梅原龍三郎に激賞された。14年4月五

女弥生子誕生。15年3月には母ヨシ没。そしてこの年妻よしが郷里沼津に転居したなど家族に変化が続いた。

昭和16年(1941)7月大館町の俳句の「とげを社」の句報に対して俳句を投句し初掲載され、8月俳誌「海紅」9月号にも投句が初掲載された。そしてこの自由律俳句は昭和23年1月号まで続いて投句した。18年2月六女輝子が生まれ、その6日後に父倉助が没した。19年初夏には单身扇田町に転居し、昭和軒に宿った。戦況悪化の昭和20年(1945)よし夫人が家族と共に部垂町の実家に疎開して来たが、直後に沼津の自宅は空襲で焼失したという難もあった。

昭和21年4月佐藤敬治ら大館町青年文化会主催、秋北公論社・北鹿新聞社後援の個展(大館町役場会議室)が開かれ、昭和19年秋から制作した郷土の田園風景を描いた作品が展示された。5月には扇田で個展(昭和軒)を行い、9月には扇田国民学校での美術・化学講座で画画部を担当した。11月扇田青年会主催の三人展(昭和軒)、12月大館町青年会主催三人展(アモエス喫茶店)を開催。大戦後には、新時代を模索し行動する青年会活動が盛んであった。その動きの中ではよく「やくざ踊り」などまで行われたが、50代半ばの彼の画展が青年たちの推すところとなっていたことは、この郷里在住画家の持つ魅力の中に、新しきものに連なるものを、若者たちが感じたからであろう。

昭和22年(1947)1月14日弥太主宰の句会「草の葉舎」が結成され第1回句会が開かれた。前年12月31日に「海紅社」主宰の中塚一碧楼が死去していることと関連があったのであろう。2月の第2回句会は家政女学校で開かれ、3月には機関誌「草の葉」がガリ版刷で創刊され、毎月10・20・30日に定例句会が開かれることになった。同月下旬第3号が発行され定例句会日は9・19・29に改められた。

23年9月秋田県総合美術家連盟主宰第1回展が秋田市千秋公園の「秋田県記念館」で開かれ出品する。翌24年5月この総合美術展連絡会に連盟県北委員として出席し、同月下旬から6月5日に及ぶ第2回秋田県総合美術展に「若者」などを無

鑑査出品する。

昭和25年(1950)2月日本美術会秋田県支部を設け、支部事務所を部垂町の弥太家に置いた。11月阿仁に2泊3日の写生旅行を行い、よし夫人・末娘輝子同行、大館に戻って間もなく「森吉タイムス」に「霜枯に行く-大阿仁紀行」なる随筆を寄稿するが、このような文章執筆も活発に行った。12月個展(山沙ホール)に沼津時代の作品4点を含む12点を出品展示した。26年5月毎日新聞主催全国美術家団体連合展(東京都美術館)に出品。7月の市制記念合同展覧会に審査員主査となる。27年4月第26回国画会(東京都美術館)に出品、また此の頃「北鹿新聞」に美術関係論説を繁く発表した。10月彼と親しい美術愛好の人々と大館市共催の第1回サロン・ド・プロメテ展(大館市公民館)に7名で20点を出品した。11月第3回小・中学校児童生徒絵画展示会(大館市立栗盛記念図書館)で審査に当たる。

昭和28年(1953)4月第27回国画会(東京都美術館)に出品。29年4月第28回同展出品。4月頃春陽会展で2点入選。6月第4回ニッポン展に出品。30年4月第29回、31年4月第30回国画会に出品。同年7月平和美術展(大阪市立美術館)出品。

昭和32年(1957)1月25日自宅で自由律句会を開催。「奥の人吟舎」と改称し、33年夏頃まで続く。6月頃弥太中心の実作主義標榜の画人たちが「ホモ・ファベールの会」を結成し、10月第1回展(大館市中央公民館)を開く。33年4月第32回国画会(東京都美術館)に「魔鳥」「昆虫」出品。国画会会友となった。10月第2回ホモ・ファベール会展、34年6月第3回同展(共に昭文堂ギャラリー)を開き、秋には個展(秋田市木ノ内デパート)を開いた。

昭和35年(1960)2月、武埴前秋田市市長・中田直敏県議会議長・川口秋田市市長・安藤五百枝秋田魁文化部長・奈良環之助氏らが発起人となり、「弥太の作品頒布会」が結成される。紙本は5~6千円、絹本は1万円だった。4月第34回国画会(東京都美術館)に「わが幼き日」出品。翌36年4月の第35回同展にも出品する。一方35年6月第4回、11月第5回のホモ・ファベール

会展に続き36年5月第6回の同展が開かれたが、この回が同展の最終展になった。

36年には東京へ転居する前に、8月に水墨画個展を比内町役場と大館市昭文堂とで2度行い、9月中旬東京に移住した。翌37年の第36回、38年の第37回国画会に出品、38年には沼津市に転居するが大館にも度々帰郷した。39年4月には第38回国画会に出品し国画会会員となった。夏には知友たちが帰郷永住の準備を始める。やがて沼津から帰郷する。

昭和40年(1965)4月39回国画会に出品。この頃安藤五百枝宛に、個展会場として木ノ内デパート借用の希望を伝えるが、前年から同デパートの画廊は閉鎖されており、借用は困難と書状で知らされる。個展は大館のホテヤ薬局と、比内町扇田の松屋で開かれた。11月初第1回新陽展(ホテヤ薬局)に歳末たすけあい色紙展(大館信用組合)があり、弥太も参加する。

41年4月第40回国画展に出品。6月玉川温泉に逗留して写生。10月第2回新陽展があり出品。42年4月第41回国画展に出品。10月には秋田市内で個展(協働社ビル新館)30余点出品。関係資料に顎鬚で微笑む画伯と並んで眼を細めたよし夫人、その背後にやや腰をかがめて好意の表情を示す三浦一郎氏の写真が「個展(協働社ビル)会場にて」と注記されて載っている。

43年(1968)1~3月伊豆方面へ写生旅行をしたという。沼津にひかれる「こころ」があったのであろう。当然のことである。4月には第42回国画展に出品。8月には日本美術家連盟推薦で秋田県農業博覧会(秋田市)に「象潟の初夏」を出品。この後病床に就くことが多くなった。11月3日「秋田県文化功労章」を受け、よし夫人・二女敬子と共に式典に出席した。

45年(1970)4月第44回国画会に出品。5月3日から5日まで受章記念回顧展が、大館市の三の丸青少年ホーム階上で開催された。46年4月第45回国画会に出品。10月『伊藤弥太水墨画集』刊行され12月出版記念展(正札竹村デパート)に約60点展示。

昭和48年6月市内軽井沢の秋田労災病院に入院すると、知友の「病床の弥太を励ます会」は、

個展（秋田市本金）を後援し、70点を展示した。

昭和50年（1975）5月31日肺炎で逝去。享年84。6月3日玉円寺で葬儀し一心院に埋葬された。11月9日遺作展（中央公民館）を開催、約70点が展示された。努力した夫人は『芳名録』の末尾に「ひとり居のうた、ねさむればいとわびしき畫は亡夫の遺作展なりし」と「お父さん！と遺影に呼びかけて在りし日を心にかみしめてひとりの夜を過ごす」と詠んでいる。自由律俳句作者の夫人であるからか否かはわからないが、字余り的な切実な和歌である。

昭和53年（1978）3月24日遺志を継ぐよし夫人や国画会会員らによって、『伊藤弥太画集』が出版される。61年（1986）1月の昭和回顧絵画展（大館市立中央公民館）にも「ピアノを弾く女」「富士山」「象潟の初夏」などの伊藤作品が出品された。平成3年（1991）2月から4月まで「秋田の洋画家伊勢正義・伊藤弥太展」が秋田県立博物館で開かれ、19点が展示された。当時まだ博物館に美術館的役割も併せ設置された形態であった。なおこの年6月末によし夫人が86歳で逝去、一心院に葬られる。

中田 羽後

明治29年（1896）9月9日北秋田郡大館町で、重治・カツの次男として誕生。明治元年12月に区分された羽後（出羽の北部）国生まれであることで羽後と命名された。前年長男である兄左内が扱捉島で生まれ亡くなっていたので、実質上は長男である。父は東京英和学校神学部中途退学、母は青森県女子師範学校卒業で、共に基督教伝道師であった。なお羽後の妹には陸奥・京がいるが、これも出生地による名と認められる。父は12月に渡米したが、留学3年目明治31年に帰朝した。家族が迎えたのは弘前においてであった。

33年（1900）家族で上京する。父は神田に中央福音伝道館を設立する。36年（1903）4月に羽後は一橋幼稚園から神田錦華尋常小学校に入学し、音楽に親しむ。3年後の39年に父は伝道上の修行のため、世界一周の旅に出た。そして翌年帰る。

42年（1907）淀船小学校を卒業し、4月青山学院中学部に入学する。神田から淀橋に移ったのは、

教会の「聖書学院」が移った明治37年10月のことであったと考えられる。

44年（1911）3月母カツが亡くなる。中学3年という多感な年齢で、上記の2人にリリー・豊を加えた4妹と共に、暗黒の中に陥ることとなる。しかも8月に父は早くも再婚する。継母は仙台生まれの今井あやめという伝道師であった。彼は「人生に新しい苦闘を展開させる」（『中田羽後の信仰と歩み』）ことになりそれから脱却する行動の如く、東洋宣教会の夏伝道に加わり、本州の各地に赴いた。級友の東郷青児や南部晴光らとマンドリン演奏などに励む。また西條八十を訪ねたりする。歌詞文学に関心を強めたのであろう。

大正4年（1915）3月青山学院中学部卒業。宣教師たちと関西に出かける。翌5年7月聖書学院に入る。そこで教理を学習中に虚無的になって、親友と争って傷を負わせるような結果になる。心定まらない状態だったのであろう。6年7月伊豆大島に渡って、父重治の後援を得てハンセン病にかかっている人たちを集め、一緒に暮らし宣教活動をしていた宮城県出身の安倍千太郎牧師に会い、信仰上の疑問を解決しようとした。安倍牧師は第二高等学校（仙台）に在学中自分も罹病して伝道に努めるようになった人格者だった。

羽後が牛飼・養鶏を手伝っている8月の或る日、安倍牧師は彼を墓地に伴ない、聖書の中の「もはやわれ生くるにあらず、キリストわが内にありて生くるなり」の言葉に思いを導き、心に衝撃を受けて地面に伏し涙の中で祈る羽後の頭に手を置いた。帰途羽後は「賛美をもってわれに仕えよ」という神の声を聞き、秋には聖書学院に戻り、ミス・スウィツァーというシカゴ大学出の宣教師に聖歌の発声・歌唱を学ぶようになった。

7年（1918）になって直ぐ沖縄に渡り2週間程滞在。4月21日午後神田のYMCA集会において、あの内村鑑三がポータブル蓄音機によって雄大な聖歌独唱を会衆に聞かせた上で、熱弁を振り「これでも復活は迷信だというのか」と拳を振り上げ大声で叫んだ。終会后羽後は銀座で、楽器店に行き1冊だけあった「メッサイヤ」の楽譜を買った。二、三日後には父と共に内村家に招かれて一晩中「メッサイヤ」のレコードを聴いたという。

8年(1919)宗教音楽の勉強のために渡米する。9年10月には父重治も米国を訪れる。彼と会って「勉強しろよ。帰国したら音楽部を設けなければならないからな」と励ました。帰国は翌10年の9月で、諏訪丸の二等船客として父子一緒に30日横浜港に帰り上陸した。これから彼の『リバイバル聖歌』の出版など活躍が展開する。

大正12年(1913)9月大震災のあった3日後に、彼が留学中シンシナチでバリトンの素晴らしい独唱を聞いたロードヘーバーが、横浜に着き彼を訪ねて来た。そしてその在日中通訳兼伴奏者で、同志社や神戸女学院などのミッションスクールを回り、更にコロンビア社でのレコード吹き込みにも手伝った。印税などを得て、翌13年再渡米をしウェストミンスター合唱学校に入ったり、15年シカゴのガン音楽学校に転じたりして学び学位を得た。昭和2年(1927)8月28日インディアナ州で前年聖書学院に留学していた今井朝子と結婚し、秋にニューヨークから客貨船で英国に渡った。

英国ではロンドン、仏国ではパリ、3年正月はスイスからイタリアと巡り、ナポリから宮崎丸で帰国の途に着いた。シンガポールでオーストラリアから帰る父と合流し、4月に帰国した。これからの5年間大活躍をするのである。帰国後直ぐの3年6月長女純子が生まれる。尚5年には長男祐治が生まれる。昭和7年(1932)『リバイバル聖歌』の編集出版を行った。昭和14年(1939)9月継母あやめが、その10日後9月24日父重治が召天というような変化があったが、家では編輯、外ではミッションスクールでの教師と多忙な生活を送った。しかし戦争中は疎開もして、在京の牧師たちが消息を知らないような状況もあった。

昭和20年(1945)8月15日終戦。やっと新しい状況が生まれたのである。間もなく疎開先の山形県から帰京し、神田のキリスト教会館にふと立寄ると、賀川豊彦を中心に会議中の在京牧師たちが顔を揃えており、賀川が「中田君、君一体、今までどこに行っていたのだ。君の行方を探していたところなんだ」と言った(『中田羽後の信仰と歩み』)という。マッカーサー元帥の命令で人心を静めるためメサイヤ演奏をしなければならないから、君それをやってくれということであったと

いう。それから数年進駐軍と学生有志と東大安田講堂など多くのところで演奏活動をした。正に輝ける存在になったのである。21年千葉に日本基督教短大の前身を興したり、22年には東京女子大の教師をしているところで、GHQの直属である「東京チャペル・センター」の「ミスター・オブ・ミュージック」なる音楽職に就任するのである。当時の占領されている日本で、異様に輝き響く存在であったに違いない。

もちろん時代は変化するからその地位の社会的受け止めも変化したには違いないが、33年(1958)には『聖歌』編集を終え11月30日献納式をする。賛美歌に口語体を取り入れた最初であるという。この年には所有の土地建物も献納して伝道に励んでいる。偉大な先覚である。

43年(1968)狭心症で衛生病院入院以後、眼病も含めて度々入院する。でも44年には『聖歌の友』創刊も遂げている。昭和49年(1974)7月14日心筋梗塞で召天まで斯界の指導性を失うことはなかったことであろう。享年79。

秋田県立博物館の「先覚記念室」が顕彰しているけれども、戦時疎開も山形で秋田ではなかった。県北の新庄方面ではあったらしいが、羽後と明治元年に区分された庄内の飽海地方などではない。特に秋田に来て教会の音楽指導を特別にやられたようでもない。この聖歌の先生にとって秋田は何であったのだろうか。

報告を結ぶに当ってふと考えてみた。それでもやはり、妹達も陸奥・京など出生地に関係すると考えられる名前である。互にその出生地のことは意識していたであろう。話題になったこともあったに違いない。聖歌学指導者の胸中に羽後大館ひいては秋田県が存在したことは確かであろう。そういえば資料の中には昭和初年荻窪の新居に暮らしている時、「朝は秋田犬を連れて散歩し、午後は家に居る時は植木いじりをし、夜は聖歌の改作と翻訳と創作にいそしんだ。一生で最高に幸福な時代であった」と自ら記すところがある。秋田犬に託された秋田県が忘れられていたのではないと思われる。